

# 広島県広島市白木町大字三田字下大椿方言 における身体感覚を表すオノマトペ

室山 敏昭

## ○はじめに

1. 対象地の地理的環境：広島市の中心部から北東へ15 kmほど入った、山間の農業集落である。集落の後方に山があり前方に田があって、国道54号線に沿って流れる三田川まで、ゆるやかな傾斜地をなして続いている。家屋は、陽あたりの良い斜面に散在して構えられている。
2. 対象地の社会的経済的環境：当該集落は、JR芸備線の中三田駅から徒歩で約20分のところに位置する典型的な農業集落であり、公民館、郵便局などの公共施設は中三田にある。
3. 生業：主な産業は農業で、米作が中心である。戦前は、養蚕も盛んに行っていた。現在は、専業農家はごく僅かとなっている。
4. 交通：JR広島駅から芸備線が日に22往復ある。また、国道54号線が整備されているため、広島市の中心部へ出るのにきわめて便利である。したがって、当該集落の若者は、広島市へ通勤する者が多く、農業は専ら年寄りの仕事となっている。
5. 人口：1991年12月20日現在、戸数が26世帯、人口が112人である。
6. 調査年月日：1991年12月26日、午後2時30分～4時00分。
7. 方言話者：A. 山田ジツヨ 大正8年生(72歳)  
B. 竹内 寿 大正3年生(77歳)
8. 調査場所：竹内寿氏宅。
9. 調査方法：当該質問票に基づく質問調査法を主とし、適宜自然傍受法による調査も交えた。身体感覚を表すオノマトペの記述は、感覚の種類を枠組として行うことも考えられるが、大半が触覚であって、感覚の種類による偏りを問題とすることができないため、記述体系の有効性が低い。したがって、身体語彙の体系の枠組である「部分全体関係」に基づいて記述し、部位による語彙量の偏り、意味の細分化、程度性の弁別、快・不快の感覚の偏りなどを、詳細に見ていくことが有効であろう。また、筆者の経験によると、オノマトペの使用には男女差がかなり著しく、個人差も認められるので、できるだけ多くの方言話者を対象とし、男女差・個人差の観点から分析を行うことが望ましいが、今回は、山田ジツヨ氏の個人語彙を記述することにとどめざるを得ない。

## I 全身の感覚

### I-1 快不快

サッパリ ○アー、サッパリ シタ ノー。ああ、サッパリしたねえ。散髪したり、風呂に入って汗を流したりした後の快感覚を表す。共通語意識は強くない。

## I-2 寒さ

### ゾット

ゾット ゾットが瞬間的な感覚を表すのに対して、この語はそれより長い時間にわたって連続的に感じる感覚を表す場合に用いる。

### ゾクゾク

ゾクゾク 上記3語に対して、方言形であるという意識が強い。老年層は現在もよく使用するという。○キョーワ ゾクゾク スル ネー。今日は(寒くて)ゾクゾクするねえ。

ジンジン ゾクゾクよりも寒気を強く感じる場合に使用する。全身に感じる感覚を表すが、「セナガ ジンジン スル ノー。」のように、背中に感じる寒さを言う場合に使うことが多い。風邪をひく前の寒さを表す。中年層以下はほとんど使用しないという。

## I-3 暖かさ・暑さ・熱さ

ポカポカ 陽気について言うことが多く、共通語意識が強い。

ホカホカ ○カラダガ ホカホカ ホガル。身体がホカホカ温かい。温かい場合にも暑い場合にも用いる。身体内部の感覚を表す。

カッタ ○タマゴザケナンゾ ノムト ネ。ヤッバリ カッタ シテ カラダガ ホテル。卵酒などを飲むとね。やはりカッとしてからだが熱くなる。

カッカ ○ナツノ アツイ トキニ ネー。タンボニ ハイッテ シゴトー スリャー カッカ シマス ヨ。夏の暑い時にね。田に入って仕事をすると、カッカしますよ。カッタが一時的な身体内部の感覚を表すのに対して、カッカは連続的な感覚(感覚の持続時間が長い)を表す場合に用いる。また、カッカは夏の日ざしの強い様や炭火が盛んにおこる様、あるいはひどい怒りを覚えて冷静さを失う様も表す。したがって、カッカは同音異義語ということになる。同音異義語の存在は、言語記号の恣意性の証拠としてよく挙げられる現象(例えば、ウルマン「言語と意味」P. 91~92)であり、その意味では、オノマトペ(特に、擬態語)も一般的な語彙と同様に、かなり恣意性に近い性質を持つということになる。

## II 皮膚の感覚

ヒリヒリ 日焼けなどをした時の痛みの感覚を表す。

ビリビリ ヒリヒリの強調形。

ベタベタ 全身に汗をかいて、シャツなどがくっついて不快な感覚を表す。また、若い男女が人前で必要以上にまつわる様を表す。この語も、第一義と第二義との間に、意味上の類似性は認められず、同音異義語と考えるのが妥当であろう。

ベッシャリ ベタベタと同義。ベタベタが共通語形で、それに相当する方言形がベッシャリである。○アセデ シャツガ ベッシャリ スル。汗でシャツがベタベタする。

ムズムズ ○ムシガ ホータ トキヤー セナカガ ムズムズ スル ヨネー。

虫がはった時には、背中がムズムズするよねえ。

カサカサ 肌にあぶら気がなくかわいた様を表す。

ガサガサ カサカサの強調形。

スベスベ カサカサの対義語。

ツルツル

ツルンツルン ツルツルの強調形。

ズキズキ

ズキンズキン ズキズキの強調形。ズッキンズッキンは、痛みの程度がさらに強い場合に用いる。これらの3語は、肌を感じる痛みよりも、頭・歯・胃などが間断なく痛む場合に用いることが普通である。

ズクリズクリ 腫れ物が痛む場合に使う。古いことば。

ズキツ 瞬間的に痛みを感じる場合に用いる。ズキンズキンのような反復形は、痛みが間断なく続く様を表す。「基本形+ト」が瞬間的な感覚を表すのに対して反復形は連続的な感覚を表し、両者の間に、時間的な長短の対立が認められる。

ジリジリ ズキズキよりも痛みがひどい様を表す。主に老年層が使用するという。

チクツ 針やとげなどが刺さった時。

チカツ チクツよりも、この語の方をよく使う。○トゲガ ササッテ チカツ シタ。とげが刺さってチカツとした。

チクチク チカツが一時的、瞬間的な痛みを表すのに対して、この語は痛みが繰り返される場合に用いる。瞬間的対連続的という対立は、一回的対反復的という対立でもある。

### Ⅲ 頭部の感覚

#### Ⅲ-1 頭

ガンガン ○カジョー ヒーテ アタマガ ガンガン スル。風邪をひいて、頭がガンガンする。ガンガンは頭痛に限って用いる。

ズキズキ 二日酔いなどで頭が痛む様を表す。

ズキンズキン ズキズキの強調形。

ズッキンズッキン ズキンズキンよりもさらに程度が大である様を表す。

ズクズク ズキズキと同義だが、あまり使わない。古いことば。○アタマガ ズクズク イター ユー ノー。フルイ ヒター。頭がズクズク痛いと言うねえ。年寄り。ガンガンのように特定の部位の感覚を表すものと、ズキズキのように多くの部位の感覚を表すものとが共存しており、注目される。後者の方が恣意性が高いと考えられる。

#### Ⅲ-2 顔面

カツ ○ハズカシューテ カオガ カツ ナツタ ユー ネー。恥ずかしくて顔がカツなったと言うねえ。酒などを飲んで全身が熱くなる場合は、「カツ スル」と表現して動詞「スル」と結合するが、赤面する場合は、「カツ

ナル」と表現して動詞「ナル」と結合する。前者は状態の持続を表すが、後者は状態の瞬間的な変化を表す。

カー<sup>ツ</sup>ット カットの強調形。

カ<sup>ツ</sup>ッカ カッカは、「カオガ カ<sup>ツ</sup>ッカ スル。」のように、スルと結合する。変化した状態が持続する様を表す。

### Ⅲ-3 目

チカ<sup>チ</sup>カ 光線などの刺激が強すぎて、目が断続的に痛むことを表す。

ゴ<sup>ロ</sup>ゴ<sup>ロ</sup> ○メ<sup>ニ</sup> ゴミガ ハイッテ ゴ<sup>ロ</sup>ゴ<sup>ロ</sup> ショール。目に塵が入ってゴ<sup>ロ</sup>ゴ<sup>ロ</sup>している。

ヒ<sup>リ</sup>ヒ<sup>リ</sup> ○メ<sup>ガ</sup> ワル<sup>ナ</sup>ッテ メ<sup>グ</sup>スリュ<sup>ー</sup> サスト ヒ<sup>リ</sup>ヒ<sup>リ</sup> シマ<sup>ス</sup>ケー<sup>ー</sup>。目が悪くなって、目薬をさすとヒ<sup>リ</sup>ヒ<sup>リ</sup>しますからねえ。

### Ⅲ-4 耳

ジ<sup>ー</sup>ント 音がする時に使う。

ジ<sup>ン</sup>ジ<sup>ン</sup> ○ミ<sup>ミ</sup>ガ ジ<sup>ン</sup>ジ<sup>ン</sup> ユ<sup>ー</sup>。耳がジ<sup>ン</sup>ジ<sup>ン</sup>いう。ジ<sup>ー</sup>ントよりも程度が大。

ジャン<sup>ジャン</sup> ジ<sup>ン</sup>ジ<sup>ン</sup>よりもさらに程度が大。○ミ<sup>ミ</sup>ガ ジ<sup>ン</sup>ジ<sup>ン</sup> ナ<sup>ル</sup>。耳がジャン<sup>ジャン</sup>鳴る。「ジャン<sup>ジャン</sup> ユ<sup>ー</sup>」とも言う。

ジ<sup>ク</sup>ジ<sup>ク</sup> 汗が出ている様を表す。

### Ⅲ-5 鼻

ム<sup>ズ</sup>ム<sup>ズ</sup> ○ハ<sup>ナ</sup>ン ナ<sup>カ</sup>ガ ム<sup>ズ</sup>ム<sup>ズ</sup> ス<sup>ル</sup>。鼻の中がム<sup>ズ</sup>ム<sup>ズ</sup>する。

ツ<sup>ー</sup>ント ○ワ<sup>サ</sup>ビガ エ<sup>ツ</sup>ット ツ<sup>イ</sup>タ ス<sup>シ</sup>ュー タ<sup>ベ</sup>ルト ハ<sup>ナ</sup>ガ ツ<sup>ー</sup>ント シマ<sup>ス</sup>ケー<sup>ー</sup>。山葵がたくさんついた寿司を食べると、鼻がツ<sup>ー</sup>ンとしますからねえ。ツ<sup>ー</sup>ントは、風圧などで一時耳が聞こえなくなる場合にも使う。

### Ⅲ-6-0 口

#### Ⅲ-6-1 全体

ネ<sup>バ</sup>ネ<sup>バ</sup> よく使う。共通語という意識は認められない。

ベ<sup>タ</sup>ベ<sup>タ</sup> あまり使わない。

ネ<sup>チャ</sup>ネ<sup>チャ</sup> 粘り気のあるものを食べる時の感覚を表す。

ネ<sup>チャ</sup>リネ<sup>チャ</sup>リ ネ<sup>チャ</sup>ネ<sup>チャ</sup>と同義だが、老年層しか使わないという。

#### Ⅲ-6-2 舌

ヒ<sup>リ</sup>ヒ<sup>リ</sup> ○コ<sup>シ</sup>ョーオ イ<sup>レ</sup>スギテ シ<sup>タ</sup>ガ ヒ<sup>リ</sup>ヒ<sup>リ</sup> ス<sup>ル</sup>。こしょうを入れすぎて、舌がヒ<sup>リ</sup>ヒ<sup>リ</sup>するねえ。

ピ<sup>リ</sup>ピ<sup>リ</sup> ヒ<sup>リ</sup>ヒ<sup>リ</sup>の強調形。極度の緊張で神経が異様に過敏になっている様も表す。

#### Ⅲ-6-3 歯

ガチガチ 寒い時。

ズキズキ 虫歯が間断なく痛むごとを表す。

ズキンズキン ズキズキよりも痛みの程度が強い。○ユンベジュー ムシバガ  
ズキンズキン ハシラカーテ ネラレダッタ。昨夜中、虫歯がズキンズキン痛  
んで寝られなかった。

ズッキンズッキン ズキンズキンよりもさらに程度が大。

#### IV 胴体の感覚

##### IV-1 肩

ズキズキ

ズキンズキン ○カタガ ズキンズキン スル。肩がズキンズキン痛む。

##### IV-2 胸

チリチリ 極度に緊張した時。○エラー ヒトノ マエデ ハナシユー スルト  
ムネガ チリチリ シマス ヨ。偉い人の前で話をする時、胸がチリチリし  
ますよ。

シュート 悲しい思いをした時。

##### IV-3 腹

ゴロゴロ 急に排便をもようした時。○ハラノ ムシガ ゴロゴロ イーダシマ  
ス ヨ。腹の虫がゴロゴロいいたしますよ。

パンパン 満腹。

ダブダブ 水などの飲料水を飲みすぎたことを表す。○オチャバッカシ ノーデ  
ハラガ ダブダブ シトル。お茶ばかり飲んで、腹がダブダブしている。

グーグー 空腹の時。○ムカシャー ヨー イゴキョータケー スゲー ハラガ  
ヘツェカラ グーグー ナリョータ ノー。昔はよく動いていたから、すぐ  
に腹がへってグーグー鳴っていたねえ。

##### IV-4 胃

シクシク

ジクジク シクシクよりも痛みの程度が大。

ズキズキ ジクジクよりも痛みが激しい場合に使う。

ズキンズキン ズキズキよりも程度が大。

ズクズク ズキズキと同程度の痛みを表す場合に使うが、今は老年層しか用いな  
いという。○ズキズキト ズクズクワ イタミワ オンナシジャ ノー。ズキ  
ズキとズクズクは痛み（の程度）は同じだねえ。

「肩」「胸」「腹」「胃」などの感覚を表すオノマトベは、いずれも反復形が  
用いられている。これは、これらの部位における感覚が、一定時間断続的に続  
くことによって、異常な状態であることが認知されることを反映する事実であ

ると解される。

#### IV -5 尻

モゾモゾ

#### V 手足の感覚

スベスベ

ガサガサ スベスベ・ガサガサは、ともに手の甲や足の裏の感覚を表す。

ヌルヌル

ヌメヌメ 鱧などをつかんだ後の感覚を表す。○ヌメヌメター ヌルヌルノ ホ

ーオ ヨー ツカイマス ヨ。ヌメヌメよりもヌルヌルの方をよく使いますよ

ガクガク 手足の震え。特に、膝について使うことが多い。

チリチリ 痺れの感覚。○アシガ シビレテ チリチリ ショール。足が痺れてチリチリしている。

#### VI 関節(骨)の感覚

ギクギク

ガクガク ○ヒダガ ガクガク スル。膝がガクガクする。

ボキッ ○マコト ホネガ ボキッ ユータ。本当に骨がボキッといった。

ボキボキ

以上が、当該方言における身体感覚を表すオノマトベの実態である。この実態を踏まえて、以下には、①形態上の特徴、②部位による量的偏り、③快・不快の感覚の量的偏りの三点について、簡単に検討を施すことにする。

##### ①形態上の特徴

形態上の特徴としては、特に次に挙げる3点が注目される。第一点は、「ズキッ」「チクッ」などの「単位形+Q+ト」の形態と「ズキズキ」「チクチク」などの単位形の反復形態との対立である。前者は瞬間的、一回的感覚を表すのに対して、後者は一定時間間断なく持続する感覚を表す。第二点は、「カサカサ」/「ガサガサ」、「ヒリヒリ」/「ピリピリ」などに見られるいわゆる清濁音、清半濁音の対立である。前者に対して後者は、ともに感覚の程度性がより大になる。清濁両語の指示的意味は同一の範疇に属しているが、音の対立によって感覚の程度性が弁別されるわけである。第三点は、「ズキズキ」に対して「ズッキンズッキン」の/Q//N/が、いずれも感覚を強調する(程度性を強める)という効果を担っているという事実である。このうち、第二点と第三点は、音価が与える印象が意味の差異として、言語体系に取り入れられた例であって、当該方言に限らず、広く日本語方言全体に認められる事実である。

##### ②部位による量的偏り

当該方言の身体感覚に関するオノマトベを見てみると、身体部位による語彙量の偏りが認められる。部位による量的偏りを、一覧表の形にまとめると、次のようになる。

身体部位	語数	比率
全身	10語	12.6%
皮膚	18語	22.7%
頭部	27語	34.2%
胴体	14語	17.7%
手足	6語	7.6%
関節	4語	5.2%
合計	79語	100.0%

左の表によって、全身の感覚に係わるオノマトベの比率と各部位に係わるオノマトベの比率との関係を求めると、次のようである。

35.3% (全身) : 64.7% (各部位)

身体部位呼称に比べて、全身の感覚に係わる比率の高いことが注目される。しかし、このうち、皮膚感覚を表すオノマトベは、これが実際に使用される場合には、ある特定の部位に限定されることが多いと推測される。その根拠の一つとして、手足の感覚を表すオノマトベと語形の一致するものが見出されること、「ムズムズ」の主部が「背中」であることが挙げられる。

各部位の比率に関しては、頭部に関する比率の高いことは、身体部位呼称とパラレルな関係にあるとみなされるが、手足に関する比率の低いことが注目される。

このように見てくると、身体部位呼称と身体感覚を表すオノマトベとは、相互にパラレルな関係を示すものではないことが理解される。身体感覚を表すオノマトベは、身体部位呼称とは異なるレベルで認識の焦点化がなされていると考えなければならない。したがって、身体感覚に関するオノマトベの量的構造を規定する要因を解明することが、今後の重要な課題とされるであろう。この問題を解明する一つの手がかりとして、身体感覚を表すオノマトベが、五感のうちどの感覚を入力とするものが多いかを見てみるものが挙げられる。「頭部の感覚」のうちの「耳」の全語、「口」における「ガチガチ」、「胴体の感覚」のうちの「胸」「腹」の全語を除く、79語中の68語までが、触覚に係わるものである。「鼻」の「ツーンツーン」、「舌」の「ヒリヒリ・ビリビリ」などの臭いや味に関するオノマトベも、基本的には触覚に根ざしたものとみなすことができる。これに対して、身体部位の呼称は、基本的には視覚による認知によって規定されていると考えることができる。身体感覚を表すオノマトベと身体呼称との部位による語彙の量的構造の差異は、触覚と視覚という感覚の相違と緊密に相関するものと、みなすことができるのではなからうか。

### ③複数の部位に出現するオノマトベの性格

当該方言における身体感覚を表すオノマトベのうち、「ヒリヒリ・ビリビリ」（皮膚の感覚・舌の感覚）、「スベスベ・ガサガサ」（皮膚の感覚・手足の感覚）などのように、複数の部位に出現するオノマトベが認められる。なかでも、「ズキズキ」は、「皮膚の感覚」、「頭部の感覚」のうちの「頭」「歯」、「胴体の感覚」のうちの「肩」「胃」の五つの部位に出現し、「ズキット」「ズキズキ」による瞬間的・持続的という弁別、「ズキンズキン」「ズッキンズッキン」のような程度性による細分化が認められ、しかも、「ズクズク」「ズクリズクリ」という関連語形も見出される。多くの部位に共通して出現するということは、音と意味との恣意的関係が強いことを示唆するものであり、「ズキズキ」

とその関連語形の比率が12.7%を占めるという事実は、「ズキズキ」が身体感覚を表すオノマトペの中で、最も基本的な要素の一つであることを示すものであると解される。しかも、「ズキズキ」は、身体の表面的な感覚も内部的な感覚も表す。いうまでもなく、「ズキズキ」は「痛み」の感覚を表すものであるから、「ズキズキ」というオノマトペに関する上述の特徴から、身体感覚のうち「痛み」に関するものが、最も基本的な感覚として認知されていると考えることができるであろう。このことは、「痛み」を表すオノマトペが、79語(延べ語数)のうち36語(45.6%)を占めていることによって、検証することができる。

#### ④快・不快の感覚の量的偏り

当該方言の身体感覚を表すオノマトペを、快の感覚と不快の感覚という視点から見分けると、快感覚を表すものは、わずか8語(10.1%)を占めるに過ぎない。他は、すべて不快の感覚を表すものであって、快・不快に係わらないニュートラルな語形は認められない。身体感覚を表すオノマトペは、概念的には快・不快の感覚が二極対立の構造を示すものと解されるが、語彙の実態に即して見ると、著しく不快の感覚に傾斜した構造となっているのである。以下に、この問題を、さらに部位と感覚の種類(誘発要因)によって検討してみることにする。まず、部位について。

快感覚を表す語の認められる部位      不快感覚を表す語の認められる部位

- |            |              |
|------------|--------------|
| I. 全身(4語)  | I. 全身(5語)    |
| II. 皮膚(3語) | II. 皮膚(15語)  |
| ———        | III. 頭部(27語) |
| ———        | IV. 胴体(13語)  |
| V. 手足(1語)  | V. 手足(5語)    |
| ———        | VI. 関節(4語)   |

不快の感覚を表す語はすべての部位にわたって認められるが、快の感覚を表す語はその半数の部位にしか見出すことができない。

ついで、感覚の種類(誘発要因)。

快感覚の種類

不快感覚の種類

清潔感

暖かさの感覚

滑らかな感覚

寒さ・熱さ・暑さの感覚

あぶら気がなくかわいた感覚

汗などによる粘着感

ものを食べる時の粘着感

痛み・痺れ・震えの感覚

かゆみの感覚

過剰な充足感

欠乏感

粘り気

緊張感・悲しみ

音

快感覚の種類(誘発要因)はわずかに3種類であるが、不快感覚の種類(誘発要因)は16種類に及ぶ。すなわち、語彙量・感覚を表す部位・感覚の種類のいずれにおいても、不快の感覚への著しい傾斜が認められるのである。これを、「身体感覚を表すオノマトベにおける下向性の原理」または単に「下向性の原理」と呼ぶことにする。このような「下向性の原理」が、身体感覚を表すオノマトベを貫いている理由としては、当該方言社会の人々が、快感覚を正常な感覚として認知し、不快の感覚を異常な感覚として認知し、異常な感覚に対して強い関心を寄せていることが考えられる。簡単に言えば、「異常な感覚に対する認識の焦点化」ということであり、この事実は、ひとり当該方言のみならず、すべての方言に共通して認められる普遍的な事実であると考えられる。人間が、通常を逸脱するものに強い関心を抱き、その方向へ認識が発達し、語彙が展開することは、すでに、「認識人類学」「心理言語学」「生活語彙学」などの先行研究によって解明されている事実である。しかし、身体感覚を表すオノマトベにおける極端なまでの「下向性の原理」は、オノマトベにおける他の意味分野には認められないことであって、ここに、当該意味分野の最も大きな特徴が存するものと考えられる。

以上、当該方言における身体感覚を表すオノマトベについて、主として体系的側面からの検討を試みた。今、身体感覚に限らず、広く方言象徴詞を視野に収めるならば、男女差や個人差の問題、さらには、運用に関する諸問題について、分析、考察を行うことが必要となってくるであろう。運用に関しては、特に、場面・人間関係によるオノマトベの出現状況の分析が、重要な課題とされるであろう。個々の方言におけるそれらの調査、分析を踏まえた上で、方言象徴詞の通時論的研究、高次共時論的研究へと研究を深化、拡大し、さらには、他の言語との比較研究まで研究を展開していくことが望まれる。

#### 参考文献

ウルマン「言語と意味」(池上嘉彦訳)、大修館書店、1969

小林英夫「国語象徴音の研究」『言語学方法論考』三省堂、1935

Schaff, A Language and Cognition. 1973

能田多代子「青森県五戸語彙」私家版、1963

藤原与一「民間造語法の研究」武蔵野書院、1986

宮岡伯人「エスキモー 極北の文化誌」岩波書店、1987

室山敏昭「方言副詞語彙の基礎的研究」たたら書房、1976

レヴィ=ストロース「構造人類学」(川田順造他訳)、みすず書房、1972

Lyons, John. Semantic I, 1977

天沼 寧「擬音語・擬態語辞典」東京堂出版、1974

辻 幸夫「カテゴリー化の能力と言語」『月刊 言語』第20巻第10号、1991

(むろやまとしあき 広島大学文学部)